

Study of the Concept of “人文学” (2) :
On the Transformation of the Concept of “文学” that Prepared the Emergence
of the Word “人文学”

TAKAHASHI Shin'ichi

In the previous paper, as a first step toward exploring the concept of “人文学”, I investigated the appearance of the word “人文学” in Japanese dictionaries from the Meiji period to the present lexicographically. In this paper, based on the results of that study, I will proceed with consideration of the appearance of the term “人文学” in English-Japanese dictionaries, which shows a different aspect from its appearance in Japanese dictionaries. In addition, as a preliminary step, I will examine the term “文学”, which is deeply related to the emergence of the word “人文学”.

In conclusion, it will be as follows. The relationship between the term “文学” and “humanities” that had been established by the early 1920s of the Meiji era collapsed when the term “文学” changed its relationship to the new idea of “literature”. As a result, it became necessary for “humanities” to form a new relationship with another Japanese word different from the term “文学” with which “humanities” had previously been associated. From the perspective of the term “人文学”, the transformation of the concept of “文学” prepared the emergence of the word “人文学”.

「人文学」の概念の考察（2）

—「人文学」の語の出現を準備した「文学」概念の変容について—

高橋 伸 一 TAKAHASHI Shin'ichi

承前

前稿¹では、明治以降の各種の国語辞典における「人文学」の語の現れを調査し、その結果から「人文学」という語は、近代西洋の未知の諸制度・思想・文物を急激に移入した明治期に「人文」という2字語の漢語が造語要素（語基）となり人工的に作られた翻訳語（複合語：「人文+学」）であると一旦仮定した。そしてそのあと、語基としての漢語「人文」の国語辞典における現れの検討に繋げていった。

前稿での到達点は、名辞「人文学」は、ラテン語の形容詞 *humanus*（人間の；人間のな、人間らしい）を語源とする洋語の一連の語彙、英語ならば *humanity*, *humanities*, *humanism* といった概念の日本における哲学的な検討過程および翻訳語の形成過程において、「人道」と「人文」という二つの漢語から何らかの影響を受けながら形成された語ではないか、という仮説であった。本稿では、その考察の成果を踏まえながら、国語辞典上の現れとは異なる様相を見せる英和辞典における名辞「人文学」の現れについて準備的な考察と調査を進めながら、その段階で浮上してきた「人文学」の語の出現に深く関わる名辞「文学」の概念的な検討を行う。

1. 準備作業：「人文学」の語の現れに結び付く 英語の語彙の絞り込み

英和辞典における名辞「人文学」の現れを検討する際には、国語辞典を調査対象にする場合とは異なり、「人文学」の語の出現に立ち会えるこの語に密接に結びついた英語の語彙を手掛かりにしなくてはならない。つまり「人文学」に通じる英語がどの語、どの語句に該当するのか、の検討をつけることが必

要になる。

その点について「人文学」は英語 *humanities* の訳語であるという通説に従って *humanities* の語を対象に考察を進める方法がある。実際、次章で提示する稿者の調査では、*humanities* を手掛かりに英和辞典を調査した結果を提示することになるのだが、ここで前もって留意しておきたい点がある。それは、名辞「人文学」が最初から *humanities* の訳語として設定された、つまり「人文学」が *humanities* の直接的な翻訳語であることを実証した先行研究は管見の限りでは見当たらないということである。それは名辞「人文学」が英語 *humanities* に対応するドイツ語の *Humaniora* またはフランス語の *humanités* などの訳語として出現し、それが同義関係にある英語の *humanities* に援用されたという可能性²あるいは *humanities*, *Humaniora*, *humanités* に訳語として付された「人文学」とは異なる日本語が先に存在し、それがのちに「人文学」に置き換えられたという可能性も視野に入れなければならないということである。要するに、*humanities* という語を対象に調査を進める前に通説とは異なる別の根拠が必要だということである。

その根拠を見出すために稿者が用いたのは、和英辞典を媒介にする方法である。つまり、「人文学」を *Jinbungaku* に置き換え、そのローマ字化された「人文学」に結びつく英語の語や語句を英和辞典の調査の手掛かりにするという方法である。

具体的には、表 I にある8冊の、現在から遡り大正期までに刊行された時代ごとの大型の和英辞典を対象に、「*Jinbungaku* = 人文学」として立項されている英語の語義を調査し検討を行った。その際、国語辞典では名辞「人文学」と密接な関係にあった「*Jinbun* = 人文」および「*Jinbunkagaku* = 人文科学」の2語についても調査しそれらの立項の有無を○×

表 I : 和英辞典におけるJinbungaku (人文学) の語の現れ

	Jinbun (人文)	Jinbungaku (人文学)	Jinbunkagaku (人文科学)
W1 武信和英大辞典 1918 [T7]	○	×	×
W2 井上和英大辞典 1921 [T10]	○	×	×
W3 スタンダード和英大辞典 1924 [T13]	○	×	×
W4 齋藤和英大辞典 1928 [S3]	×	×	×
W5 研究社 新和英大辞典 1931 [S6]	○	×	×
W6 研究社 新和英大辞典 第3版 1954 [S29]	○	×	○
W7 研究社 新和英大辞典 第4版 1974 [S49]	○	○	○
W8 研究社 新和英大辞典 第5版 2003 [H15]	○	△	△

(注: △は立項されていないが、「人文」の複合語の用例として「人文学」「人文科学」に対応する英語が掲載されていたことを示す。)

で表 I に反映した。

まず表 I から分かることは、Jinbun (人文) の語が W4 を除き大正期以降のすべての大型和英辞典で立項されている点である。また、Jinbunkagaku (人文科学) は 1950 年代以降に立項され始め、一方、Jinbungaku (人文学) は、W7 の 1 冊を除き全く立項されていない。

そこで注目したいのが、W7『研究社 新和英大辞典 第4版』(増田綱主幹, 1974) である。理由は、この辞書では Jinbungaku だけではなく Jinbun も Jinbunkagaku も、三つの語すべてがそれぞれ独立して立項されているからである。

ところで W7 に具体的に注目する前に、ここで一旦、和英辞典においてローマ字化された日本語が立項されるということはどういうことなのか、という点を確認しておきたい。

それは、日本語「人文学」がローマ字綴りの日本語 Jinbungaku を媒介にして、英語による定義を持つということである。そもそも前稿で指摘した通り、明治期から現在に至るまでの国語辞典の領域では、「人文学」の語が立項されたという痕跡を見出せなかった。つまり、名辞「人文学」は国語辞典の領域では自らのポジションを持つことができず常に浮遊した状態にあった。しかし、W7 の和英辞典では定義語が日本語ではなく英語ではあっても、定義化(立項)されている。そのことは W7 によって名辞「人文学 (Jinbungaku)」が初めて、日本語としての地位を獲得したということになるのではないだろうか。

どうしてこのようなことが起こるのであろうか。その点について英文学者の福原麟太郎は次のような示唆的な言葉を残している。

〔前略〕私どもは、むしろ、和英辞典の方が、国語辞典よりも早く、国語を systematic に整理するようになるかも知れないと思っている。例えば、そこらの和英辞典と国語辞典とを比べてごらん下さい。和英の方が、含有する言葉が断然多い。勿論、和英には、古語や雅言は、すくないかも知れない。然し、現代語については、国語辞典よりも多くの語彙を収載し、又、その語意の分類なども、はるかに綿密である。これは、翻譯をしたりなどする時には、国語の意味をよく考えて、それに當る英語を選ぶものだから、自然、細かな意味の區別をするようになり、国語学者が考えうるよりも、細かな分類をするようになるからだと思う。³

和英辞典の方が、「国語辞典よりも早く、国語を systematic に整理するようになる」根拠として福原が念頭に置いているのは、和英辞典も、英和辞典と同様に「*Concise Oxford Dictionary* のように語學的に整理されたもの」が有する何かしらの「system」を利用することができる点である⁴。つまり、英語が持つこの「system」を活用することによって、日本語だと未整理・未分類であった語の意味を分節化することができるという訳である。この観点から考えると、W7 で「人文」と「人文学」と「人文科学」の3語が細かく分類され立項されているのは、例えば、英英辞典 *Concise Oxford Dictionary (COD)* やその COD の親辞典である *Oxford English Dictionary (OED)* などの語学的な「system」を用いたからではないかと推測できる。

それでは、実際にこの三つの語がどのように W7 の和英辞典で整理・分類されているのかを具体的に見てみよう。

Jinbun 人文 *n.* 1 [倫理・秩序など] *humanity*.
 2 [文化] *civilization; culture*.
Jinbun-gaku 人文学 *n.* *humane studies*;
humanities, polite [humane] learning;
 (羅) *literae humaniores*.
Jinbun-kagaku 人文科学 *n.* *cultural sciences*;
humane studies [learning];
 (独) *Kulturwissenschaft*.

上の辞書内容で名辞Jinbungaku (人文学) に密接に繋がっていく英語の観点から注目したいのは、JinbungakuとJinbunkagakuとが、*humane learning*と*humane studies*という共通要素を持ちながらも別々に立項されている点である。その要因は、Jinbungakuが羅典語*literae humaniores*と、またJinbunkagakuが独語*Kulturwissenschaft*と、それぞれ別々に同義の関係を結んでいることに求めることもできるが、それでは英語という観点には適合しない。英語の観点を強調するならば、その要因は、Jinbungakuが同義語として*humanities*と密接な関係を結んでいるのに対し、Jinbunkagakuが*cultural sciences*と同様の関係を結んでいる点に求めることができるのではないと思われる。つまり、W7の辞書では、Jinbungakuは*humanities*ではあるが*sciences*ではない、同様にJinbunkagakuは*sciences*であるが*humanities*ではない、ということが別々に立項されている主要因ということになるだろう。

以上、*humanities*が名辞「人文学」に密接に結びついた英語であり、この*humanities*の語を手掛かりに「人文学」の現れについて英和辞典の調査を進めることの妥当性を示せたのではないかと思う。

ところで本章の最後に、これ以降の考察にも関連することなので、W7の辞書が用いたかもしれない「system」を具体的に英和辞典の中から二つ示しておきたい。もちろん、以下に示す「system」をW7が直接的に用いたかどうかについてはここでは問題ではない。別の「system」を用いた可能性も十分ありそれはそれで構わない。ただ、今から示す英和辞典の箇所とW7のJinbungakuの英語の定義との間に何らかの関係性があることが示せれば、それはこれ以降の考察にとっても有益なことであると稿者は考えている。

以下、*COD* (*The Concise Oxford Dictionary of Current English*, Fifth Edition, 1964) と *OED* (*The Oxford English Dictionary*, First Edition, 1933) の順に該当箇所を引用する〔一重下線・二重下線・波

線稿者〕。

humanity (*COD* より)

[…]

the~ies, polite scholarship, esp. of Latin & Greek classics;

humanity (*OED* より)

[…]

4. Learning or literature concerned with human culture: a term including the various branches of polite scholarship, as grammar, rhetoric, poetry, and esp. the study of the ancient Latin and Greek classics.

a. [...]

This (=15-16th c. It. *umanità*, F. *humanité*) appears to have represented L. *humanitas* in its sense of 'mental cultivation befitting a man, liberal education', as used by Aulus Gellius, Cicero, and others; hence, taken as = 'literary culture, polite literature, literae humaniores'; but it was very often, in scholastic and academic use, opposed to *divinity*, as if = secular learning.

b. *pl.* (Usually with *the* : = Fr. *les humanités*.)

ローマ字語Jinbungaku (人文学) に結びつくという観点から引用した英和辞典の*humanities*の語釈を細かく分類整理した場合、注目したいのはJinbungakuの語の周りに英語の二つの語彙体系が出来上がるという点である。まずは一つめの体系から説明しよう。

一般的には、名辞「人文学」は*humanities*という*humanity*の複数形に直結すると考えられている。*COD*ではその考えの通り複数形*the ~ ies* (= *the humanities*) の状態で語義が立てられ、そのことによってJinbungaku (人文学) は*polite scholarship*と結びつく。一方、*OED*の場合は、複数形*humanities*は二重下線部のように語釈の第3レベル⁵で短く定義が立てられているだけで、ここにJinbungakuが結び付いたとしても重要な意味内容はほとんど得られない。つまり*OED*の「system」だと、複数形*humanities*だけに結び付くと考えられていたJinbungakuは、単数形*humanity*に結び付かざるを得なくなる。そのように考え、*OED*における単数形の*humanity*の第4定義にJinbungakuを結びつけ

るとどうなるであろうか。まず, Jinbungakuは learning, literature, human culture, studyに, さらにはCODの時と同様にpolite scholarshipに結び付く。その後, 語源的説明が展開される文脈のなかで, イタリア語 *umanità* やフランス語 *humanité* を引き寄せながら, ラテン語の *humanitas* に結合する。そして, ヨーロッパ関連諸語の起源になる *humanitas* は, 現代英語の mental cultivation と liberal education に結び付きながら, literary culture, polite literature を通過しつつ, 最後には *divinity* と対立し secular learning に到達する。これが Jinbungaku の語の周辺に形成される一つめの英語の語彙体系である。

もう一つの体系は, COD と OED をまとめて示すならば, 次のようになる。それは Latin & Greek classics, branches, grammar, rhetoric, poetry, the ancient Latin and Greek classics, Aulus Gellius, Cicero, ラテン語の複数形 *literae humaniores* といった語彙(波線部)で形成される体系である。これら二つの語彙体系と先に示した W7 の Jinbungaku (人文学) の語義を見比べれば, そこに何らかの関係があることは明らかであろう。

最後に, この二つの語彙体系の特徴について端的に述べておくならば, 前者の体系(一重下線部)は Jinbungaku (人文学) を単数性(抽象性)へ, 言い換えれば「一」に引き付ける体系であり, 後者の体系(波線部)は複数性(具体性)へ, つまり「多」に引き付ける体系である。このように OED などの「system」を用いて Jinbungaku の語を考える場合には, この「一」と「多」という全く方向性を異にした両方の観点が必要になるということである。

さて, ここで準備作業を終え, 次章では humanities という語を手掛かりに英和辞典における「人文学」の現れを具体的に見てみたい。

2. 調査結果から浮かび上がった humanities に 対応する日本語の通時的概観

今回の調査では, 近代以降(幕末の文久, 慶応を含め)平成中期までに刊行された50冊の英和辞典を対象に, 英語の humanities に対応する日本語を調べた⁶。その結果をまとめたのが稿末に付した表Ⅱである。

表Ⅱから一目瞭然なことは, humanities に対応している日本語が明治期においては「人文学」ではなく「文学」であったということである。名辞「人文学」と humanities との間に同義の対応関係が見出せ

た最初の事例は, 1913 [T2] 年刊行の E30『新撰英和辞典』(増田藤之助著, 丸善)においてであり, それまでの英和辞典では humanities に「人文学」は対応していなかった。

この点を重視し英和辞典における「人文学」の語の現れを通時的な観点からまとめるならば次のようになる。明治期には「文学」の語のみが英語の humanities に対応していたが, 大正初期に「人文学」の語が humanities に対応し始めると, 戦前(昭和)まで「文学」と「人文学」が「古典」という名辞を伴いながら humanities に寄り添い, 戦後(昭和)になると「文学」は姿を消し, 名辞「人文科学」が登場してきた, という概観になる。

なぜ大正初期の英和辞典に「人文学」という語が出現してきたのか, 言い換えれば, humanities と関係し始めたのかという点に関しては, 前稿で考察したように国語辞典での「人文」の語の出現が, 1907 [M40] 年の『辞林』(金澤庄三郎編, 三省堂書店)においてであり, 英和辞典における「人文学」の語の出現は, 時期的にも名辞「人文」の出現の6年後となるので, 何らかの関係があるのは確かである。ただし, この関係についての考察は別稿に委ねることとし, ここでは現時点で明確に浮かび上がっている問い, 即ち, なぜ明治期に「文学」が humanities と密接に結びついていたのかという点に焦点を絞り考察を深めていきたい。

3. 明治期における「文学」の概念の検討

—humanities と「文学」との結びつきを求めて

「文学」という語は, 現在では当たり前のように存在している身近な語である。それがなぜ英和辞典の領域では明治期全般に互って humanities に結びついていたのであろうか。この問いを考えるには, まず明治期における「文学」概念の検討が必要になる。この点について, 英語 literature や中国および日本の「文学」の概念の歴史を丁寧に振り返りながら, 近代における訳語としての「文学」の誕生と近代的「文学」の成立を詳しく論述した貴重な先行研究が存在する。鈴木貞美(1998)『日本の「文学」概念』(作品社)である。本章では, この先行研究を参考にしながら, 日本で最初の近代的国語辞典とされる『言海』(1891 [M24])の「文学」語義を具体的に検討し, 限定的ではあるが「文学」概念に検討を加えた後, humanities と名辞「文学」との結びつきについて明らかにしていきたい。

まずは『言海』における見出し語「文学」の語釈を示したい。

文學（一）書ヲ讀ミテ講究スル學藝，即チ，經史詩文等ノ學。（武術ナドニ對ス）（二）又，語學，修辭學，論理學，史學，等ノ一類ノ學ノ總稱。⁷

『言海』では「文学」は「(一)」と「(二)」の二つの定義から説明されている。先に第1の定義「(一) 書ヲ讀ミテ講究スル學藝，即チ，經史詩文等ノ學。（武術ナドニ對ス）」を考えていこう。

この第1定義を考える場合、前半の「書ヲ讀ミテ講究スル學藝」を「文学」の理念的な定義ととらえ、後半の「經史詩文等ノ學」を具体的な定義ととらえるのが妥当であろう。そう考えると、「文学」とは「書」を読み深く調べその意味や本質を説き明かすことを目的とした「学芸」であり、具体的には、四書・五經・十三經などの經書、史書、漢詩、漢文といった「書」を対象に、それらを講究することを目的とした「学」ということになる。この第1定義における「文学」は、鈴木が指摘する「儒学と漢詩文を指す「文章」の学という領域に限って用いられていた」徳川後期の「文学」の概念⁸に近似したものと考えてよいだろう。また、そのことはこの種の文学概念が『言海』の刊行される明治20年代までは存在していた、ということも意味している。

ちなみに、「文学」に含まれる「文」という語そのものには「(三) 書ヲ讀ミテ學藝ヲ修ムル」。「文學」という語義が『言海』にはある⁹。この「文」の概念が「文学」の第1定義における理念的な部分「書ヲ讀ミテ講究スル學藝」と結びついていることは明らかであるが、「文」の語釈にある「修ムル」という語義に注目することによって、このタイプの文学概念が有する別な側面を浮き上がらせることができる。

『言海』の「をさむ（修ム・治ム）」の項目には、五つの語義が存在する。「(一) 其所ニ居エ安ズ。齋ヘ鎮ム」「(二) 養フ。寵ス」「(三) 正シクシテ守ル」「(四) ツクロフ。ナホス。修復ス」「(五) 善ク學ビ習フ」である¹⁰。「書ヲ讀ミテ學藝ヲ修ムル」の「修ム」を一義的に考えれば「(五) 善ク學ビ習フ」と結びつくのは明らかだが、多義性に重きを置きこれらの語釈を多義的に適応させると、そこにひとつの人間像が浮き上がってくる。分かりやすく現代語風にするならば、それは、「書」を読むことを目的とした「学芸」を「身につけ」、それを「責任をもって世話をする」ことによって「自分の行ない、態度、心

などを整え正」し、「混乱した状態をしずめ」たりしながら、「物事を穏やかにかたづけ」「落ち着いた状態にする」といった人間存在の儒学的なイメージである¹¹。

以上、『言海』における「文学」の第1定義を考察してきたが、端的にまとめるならば、それは鈴木が指摘する、儒学と「文」の概念に基づいた伝統的な「文学」観であると言えるだろう。

次に『言海』における「文学」の第2定義に移ろう。この意味の特徴は二つある。一つは、「文学」が「語學，修辭學，論理學，史學，等」の同類の学の「総称」になっている点である。このことは、名辞「文学」そのものが「単(一)」であるにも関わらず同時に「複(多)」である性質を持ち合わせていることを示している。「文学」の語が有するこの性格は、のちに検討する humanities と逆の関係になっている。というのも、humanities は形式的には「複(多)」であるにもかかわらず、前章で言及したように「一」である (humanity であること) から切り離せないからである。それではどうして「語學，修辭學，論理學，史學，等」の同類の「総称」が「文学」なのであろうか。それは「文学」が、第1定義で検討した名辞「文」に含まれる人間観を目指すための「文＝文章」の「学芸」なのだ、という観点から考えると理解しやすいかもしれない。

一見すると、「語学，修辞学，論理学，史学」といった四つの学には何の共通点もない、バラバラの学の集まりのように見えるが、よくよく考えてみると、これらすべては「書」あるいは「文字」「文章」など、言葉という点で結び付いている。「語学」は古い時代の「書」や海外の「書」を読むことを目的とする「学芸」である。「史学」は人間の「語り (story)」の本質から形成され、時間によって練磨された価値が集積する「歴史 (history)」や「古典」の「書」を対象にする。どちらも講究すべき対象となる「書」に結び付いている。一方で、修辞学と論理学もまた、語学と史学のように「書」の意味や本質を説き明かすための「学芸」ではあるが、これらの二つの学は「書」を説き明かすだけではなく、その後それを他者に表現し伝えるといった能動的な行為とも結び付いている。つまり『言海』における「文学」とは、ただ単に「書」を受身的に読むことを目的とした「学芸」であるだけでなく、「文章」を書くこと・語ること、あるいは生きることそのものにも密接にかかわっている「学芸」だ、ということになるだろう。そして、その受動的かつ能動的な両方の視点から「学芸」を捉

えることによって、人間は「文学」を通して「文」の中に含まれている人間像へアプローチすることができるのではないだろうか。

最後に「文学」の第2定義の二つめの特徴だが、それは「語學、修辭學、論理學、史學」が儒学的な学（「經史詩文等ノ學」）ではなく西洋的な学であるという点である。このことは、「文学」の第1定義の「書ヲ讀ミテ講究スル學藝」といった儒学的な文学理念を西洋的な学に適応させたと考えることもできる。逆に考えるなら、「文学」が「語學、修辭學、論理學、史學」の「総称」となり得るのは、これらの学に「文学」の理念、より根源的な言葉で言い換えれば、「文」の理念が通底しているからに他ならない、ということになる。

このように考察を進めてくると、前稿で「人文」と「人道」という2字語を検討した際、humanitiesに結び付いた漢語「人道」の用例として引用した西周の著述の部分、即ち『百学連環』（1870 [M3]）「総論」の中の一連の文章が、新たな別の重要な意味を持ってくるように思われる。

文と道とは元ト一ツなるものにして、文學開クときは道亦明かなるなり。故に文章の學術に係はる大なりとす。〔中略〕

西洋に文章のことを Belles-lettres [佛語:好文字] と云ふあり。英語 Humanities [人道] 或は Elegant Literature [高上ノ文章]、英國文字をヒマニッチと云ふ意は即ち Mental Civilization [心ノ開化] なる意にして、凡そ文字なるものは心を開くものなれば、文字をヒマニッチ即ち人道と云ふに至れり。心の開くは是道の明かなるなり。心の開くは文字に關係する最も大なりとす。

文章に五ツの學あり。Rhetoric [文章學: 話スノ術ト辞書ニ見ユレハ奇麗ニ文章ヲ書ク學ナリ]、Poetry [詩]、History [歴史學]、Philology [語原學]、Criticism [論辨學]、Belles-lettres [義理上ニ原ツキテ書ク文章ナリ] を學ふものは、此の五學をなさゝるへからず。¹²〔下線稿者〕

引用の冒頭（下線部）で西が述べている「文と道とは元ト一ツなるものにして、文學開クときは亦道明かなるなり。故に文章の學術に係はる大なりとす。」という文章が最も注目したい部分である。ここには、先に考察した『言海』（1891 [M24]）の「文学」の語積から読み取った、儒学と「文」の概念に基づいた「文学」観が含まれていると思うからであ

る。ただし、この文章の考察を始める前に一つ断りを入れておきたい。この文章の中核になる「道」という語に関して、稿者には儒学に基づいた概念的アプローチを展開するだけの余裕がない。そのためここでは文学的なアプローチ、即ち、「道」というイメージを用いてこの文章全体の意味を解き明かしていくことをお許し願いたい。

さて、この視点からこの下線部の文章を考えた場合、キーになるフレーズは「道亦明かなるなり」である。ちなみに「明かなるなり」という語句は、形容動詞ナリ活用「明かなり（さやかなり）」の連体形に断定の助動詞「なり」が付いたものである。「さやかなり（明かなり）」は「清かなり」とも書き、「明るく清らかであるさま」¹³を意味している。それでは「道」が「明かなる」とは一体どういうイメージであろうか。

そもそも道が明かなることの前提になるのは、道を明るく照らす「光」が存在することである。その光が存在しない限り、道は「明るく」はならず「闇」の状態のままである。また、ここで道を明るくする光は、その道を歩んでいく人間にとってその光のもとに到達してそれを簡単に手にすることができるようなものであってはならない。というのも、その光をつかんだ瞬間に道を明るくしていた光は失われ、道は闇に閉ざされるからである。それゆえに「光」は、人間が目指そうとする（あるいは目指すべき）目的でありながら、簡単には到達できない目標のようなものでなければならない。こうしたイメージから考えると、人間が「光」を見出しそれが自らの歩む道を照らし出してくれる状況が「明かなる」といった状態で、「光」を見出せない状態は迷いの状態である。当然、光の存在しない闇に閉ざされた迷いの状態は「明かなる」状態でも「清かなる」状態でもない。

こうした一連の語の連関のイメージで考えると、現在考察の対象としている部分は次のように解釈できるであろう。

つまり、「文學」という「文」の「學藝」に「係はり」、それが「開ク」こと（良い方向に行き、繁栄すること）によって、「光」は見出され歩むべき「道」も見出される。それゆえに「書ヲ讀ミテ學藝ヲ修ムル」(=「文」)なくして、「光」も「道」も存在しない。「文」によって「光」は見出され「道」も見出されるのであるから、「文と道とは元ト一ツなるもの」である、と。

次に、引用した西の文章全体で注目したいのは、「光」と「道」が見出される手段（方法）になるところ

の「文」の「學藝」を具体的に記述している点である。それは引用後半部の Humanities, Elegant Literature, Belles-lettres といった上位の語彙の下に、配置される「五つの」「文章」の「學」である。ところで、まだ稿者の考察の中で言及していなかったが、Elegant Literature も Belles-lettres も Humanities と同義語である。そのことは、OEDの簡略版である SOD (*The Shorter Oxford English Dictionary*, Third Edition, 1972) における Belles-lettres の語釈を見てもらえれば明らかであろう。

Belles-lettres, *sb. pl.* 1710. [Fr.; 'fine letters', parallel to *beaux arts*; embracing grammar, rhetoric, and poetry.] Elegant literature or literary studies; formerly='the humanities', *literae humaniores*. Now= 'literature'; and *esp.* applied to light literature, or the aesthetics of literary study. [下線稿者]

この点を踏まえ Elegant Literature も Belles-lettres も Humanities に含みこませれば、西の文章には Humanities を上位概念とする五つの「文」の「學藝」(=「文學」) が具体的に記述されている、とすることができる。(ここでは、西が Humanities に付した「人道」という訳語については敢えて言及しないことにする。)

その五つの「文学」とは、Rhetoric, Poetry, History, Philology, Criticism である。この五つの学は、『言海』における「文学」の第2定義の、「語学、修辞学、論理学、史学、等ノ一類ノ学」に対応していることはすぐに分かるであろう。Rhetoric は「修辞学」、History は「史学」、Philology は「語学」、Criticism が「論理学」。Poetry に対応する語だけは『言海』には表出されていないが、表Ⅱを見ればすぐに分かるように、明治期には Poetry に対して「詩学」という語が当てられていた。

以上、明治期の英和辞典全般にわたって「文学」という語がなぜ humanities に結びついていたのかという問いを掲げ、本章での考察を展開してきたが、ここで結論として言えることは、少なくとも『言海』における「文学」概念は、humanities の概念のリセプターとして機能していた、ということである。そのことは、明治期においては humanities の訳語としての「文学」が成立していた、つまり、humanities への対応語が「文学」であった、ということの意味している。その大きな要因は、儒学と

「文」の概念に基づいた「文学」概念が、humanities の概念と緊密な親和性をもっていたからではないかと思われる。

その関係については、鈴木貞美の示唆的な言を本章の最後で紹介しておきたい。

鈴木は「訳語「文学」の誕生」『日本の「文学」概念』の中で、稿者が取り上げた西周の文章と同じ箇所について分析している (pp.132-137)。literature と訳語「文学」の観点からのアプローチなので、解釈が稿者とは異なる点も存在するが、humanities と「文学」との関係について以下のような重要なことを述べている。

西周が“belles-lettres”や“humanities”の観念を美的価値に限定するかどうかには格別な関心をはらわずに、こうした解説をおこなったことには、あるいは「人の道」を説く儒学と、俗語の読み物に対して高級な漢詩文を意味する「文章」とを合わせた伝統的な「文学」の観念が強く働いたかもしれない。言い換えると、“belles-lettres”や“humanities”も、神学や聖書の学など、それらの対義語を考えないなら、ごく自然に日本の伝統的な「文学」に相当する語のように思えるということだ。¹⁴ [下線稿者]

ポイントは、humanities が儒学と漢詩文を指す「文章」の学とを合わせた伝統的な「文学」の観念に相当する語であると、literature と「文学」との関係を検討する鈴木が考えていることである。このことは、明治期においては、humanities への対応語としての「文学」が成立していたことを示す十分な根拠になるのではないだろうか。

それでは明治期の文学概念の考察はここで一旦区切りをつけ、次章では、英和辞典における humanities の対応語としての「文学」の現れとその現れが象徴する名辞「人文学」との関係を検討していきたい。

4. 明治期における humanities に対応する「文學」という語の現れの特徴

本章では明治期の英和辞典における humanities に対応する「文学」という語の現れの特徴について検討していきたい。

まず指摘したいことは、明治期の英和辞典における humanities に係る「文学」の語の現れには、三つの特徴的な類型が存在するという点である。その

類型とは、具体的には以下のようなものである。それらをひとつずつ説明していこう。

[第1類型] 文孝詩孝及び希臘羅甸ノ語孝ヲ摠テ云フ語 (E1『英和对訳袖珍辞書』1862 [文久2])

[第2類型] 文學(語學。理論。羅甸及希臘語學。詩學ヲ云) (E5『附音挿図英和字彙』1873 [M6])

[第3類型] pl. 文学. (E19『和訳英辞彙』1887 [M20])

4.1 第1類型—humanitiesの外延としての「文学」

第1類型の特徴は、humanitiesが外延的に日本語によって定義され、その外延の一つの要素として「文孝(文学)」が現れているパターンである。よって厳密に言えば、この類型における「文孝」はhumanitiesと同義の関係にはない。humanitiesと同義の関係を結ぶのは、「文孝」「詩孝」「希臘羅甸ノ語孝」の三つの学を統括してひとまとめにした「文孝詩孝及び希臘羅甸ノ語孝ヲ摠テ云フ語」という語句だからである。

今回の調査対象にした英和辞書の中で、名辞「文学」がこのようにhumanitiesの外延として現れている例は、8例確認できた(E1~4,13,16,18,27)。

ところで第1類型は、今回の調査対象では最も早いE1『英和对訳袖珍辞書』(堀達之助等編, 1862 [文久2])に最初に現れている。この『英和对訳袖珍辞書』は、森岡健二がその編著『近代語の成立—明治期語彙編』(明治書院, 1969)の中で設けている英和辞書史の区分の「第一期(明治五年以前)」¹⁵の始点になる辞書である。E1とその影響下にあるE2~4の合計4冊は、『英和对訳袖珍辞書』系の英和辞典とも呼ばれている。この系の辞書の特徴は、英語学が蘭学になかば依存していた当時、英蘭辞典のオランダ語訳に依って英語と日本語を結びつけた点にある¹⁶。したがって、E1のhumanitiesに対応する「文孝詩孝及び希臘羅甸ノ語孝ヲ摠テ云フ語」という日本語表現は、humanitiesに対応するオランダ語訳と大きな関係を結んでいる可能性がある。

また、第1類型が、明治初期だけではなく明治10年代、20年代、30年代後半まで広い範囲で見られるのは、E1がその後の英和辞典に大きな影響を与えたからだと考えるのが妥当であろう¹⁷。

4.2 第2類型—humanitiesと二重の意味で同義関係を結んでいる「文学」

第2類型の特徴は、humanitiesが「文学」と直接同義関係を結び、humanitiesの日本語による定義が

humanitiesの外延的定義ではなく「文学」の外延的定義になっている点である。このパターンは、前章で考察した『言海』(1891 [M24])における「文学」の第2定義と同型になっていると考えてよい。そこで『言海』的に第2類型を言い換えて、humanitiesの定義を日本語で表現するならば、humanitiesとは「語學, 理論, 羅甸及希臘語學, 詩學」を総称する「文学」である、ということになる。

ちなみに明治期の英和辞典の中で第2類型が初めて出現したのは、E5の『附音挿図英和字彙』からであり、調査対象の中でこの類型が確認できたのは8例であった(E5,6,10,11,15,17,20,29)。現れの時期は、E29を除くと、1873 [M6]年から1888 [M21]年の15年間に集中している。

ところで、この第2類型は第1類型にただ単に「()カッコ」を付けたにすぎないと思えるかもしれないが、実はこのカッコを付けたこと、別な見方をすればカッコの発見は、第1類型の語積の中身を完全に替えるものである。そしてこのカッコの出現によって、humanitiesに対する日本語の語積の意味が『言海』の「文学」の第2定義に同化するならば、前章で明らかにした通りhumanitiesの概念は、少なくともこの第2類型が英和辞典に見られる間は、儒学と「書ヲ読ミテ學芸ヲ修ムル」¹⁸という「文」の概念、つまり伝統的な「文学」の概念を基礎にして理解されていた、と考えることができる。E1からE5に現れているラテン語のhumanusを語源とする一連の英語への名辞「文學」の対応は、この考えを補強してくれると思う(表II参照。E1~5におけるhumanistと「文學者」の対応。E2~4におけるhumanityと「文學」との対応。E5におけるhumanismと「文學」との対応)。

なお『附音挿図英和字彙』(柴田昌吉・子安峻編, 横浜日就社)は、E1からE4までのオランダ系とは異なり、原著の英語辞書を底本にして作成されたとされる日本で最初の本格的な英和辞典で、後の英和辞書に及ぼした影響も大きい出色の辞書である¹⁸。

4.3 第3類型—humanitiesを空語化させる名辞「文学」

第3類型は、その表現形式から見れば最もシンプルな語義である。その殆どはhumanityの見出し語の中に追項された複数形の略記号(pl.)を伴って、「文学」という語が単独にhumanitiesに対応する形で現れる。今回の調査対象とした英和辞典で、この第3類型が最初に出現したのはE19の『和訳英辞彙』

(1887 [M20])であり、このE19を含めて確認できた事例は全部で七つである(E19,23,24,25,28,33,35)。そして、この7例の中の4例が、明治20 [1887]年から明治35 [1902]年の15年間に現れ、その最後の現れはE35の『模範新英和辞典』(1919 [T8])であるから、明治中期から大正期にかけてかなり広い時間的なスパンで影響力をもった類型であると言える。

第3類型の特徴は二つある。一つは、すでに述べたようにそのシンプルさである。しかし、この語義のシンプルさは大きな問題を孕んでいる。それは、humanitiesの対応語として「文学」が有していた複数性(具体性)がこのシンプルさによって消去されてしまうからである。もちろん、第2類型で「文学」の外延として記されていた「語学、理論、希臘及羅馬ノ語学、詩学」等の複数性がすでに記載する必要もないほど、「文学」の外延として明治社会に認知されるようになったという背景があるならば、この単純な類型も成立する可能性はある。しかし、それでもこの類型が英和辞典内で意味を持つには、本論第1章のOEDにおけるhumanitiesの語義の検討の際にhumanities(多性)がhumanity(一性)に結びつかなければならないことを指摘したように、「pl. 文学」はhumanityに結びつきその「一性」に支えられなければならない。そこで、第3類型が確認できた7冊の辞書でhumanityの語義を確認したが、この「pl. 文学」と結びつきそれを支える「一性」としてのhumanityの語義、具体的には「文」の理念に相当する語義は見つけることができなかった。

第3類型の特徴の二つめは、第3類型の最初の現れ(1887 [M20])と第2類型の現れの終息、つまり、第2類型の最後の現れ(E20『和訳字彙(ウェブスター氏新刊大辞書)』(1888 [M21]))がほぼ同時期に起こっているということである。名辞「文学」の現れに関するこれら二つの特徴は一体、何を意味しているのだろうか。

この問いを解く鍵は、第2類型の最後の現れおよび第3類型の最初の現れから約5年後の明治26(1893)年に発刊された、国語辞典『日本大辞書(第10巻補遺)』(山田武太郎 [山田美妙] 編纂、日本大辞書発行所)に存在する。編纂者の山田美妙は見出し語「文学」の語釈(p.1270)の中で、この時期に起こっていたと推定できる名辞「文学」の変化を次のように語義の形式で記述している。

文學 漢語。(一)書物ヲ研究スル学藝。武術ニ對シテ一般ノ學問ヲ指ス。(二)語學、修辭學、歴史學、ナドノ無形ノ學ノ總名。(三)〔専ラ英語、Literatureノ譯〕スベテ、然ルベキ智識ノ程度ノアル一般ノ人ニ理解出來ル文言ヲ用キ、最モ普通ニ觀念ヲ與ヘ、最モ宇宙ノ眞、善美ト考ヘラレル處ヲ發揮スル學。コレニ由ッテ言ヘバ語學、修辭學、論理學、史學、哲學、詩學ナド從來、假リニ文學ト見做シタ部類ノ中カラ段段ト此定義ニ外レテ獨リ残ルノハ詩學ナドニナル。〔下線稿者〕

上の「文学」の語釈から分かることは、humanitiesに対応していた名辞「文学」が、その対応先を新しい理念を有したliteratureに変えることによって、従来の「文学」が具体的に有していた外延、つまり、「語学、修辭学、論理学、史学、哲学、詩学」を失っていくという状況である。このことは、humanitiesと「文学」との語レベルでの対応関係は残るが、その具体的な内容は空語化し、そのことによってhumanitiesという語も実質的な内容を失っていくことを意味している。

名辞「文学」のhumanitiesからliteratureへの指向性の変化について、鈴木貞美はliteratureと「文学」の関係の側から次のような重要な指摘をしている。

「文学」と“literature”の結びつきが強くなってゆくにつれて、“literature”の様ざまな訳語は次第に淘汰され、「文学」という語が他の訳語を駆逐してゆくことになる。その結果として、今日のわれわれは英語“literature”が間口の広い多義的な語であることを、つい忘れてしまうほどになったのである。では、なぜ、「文学」は他を押しつけて“literature”の訳語として定着してゆくことになったのか。¹⁹

上の引用では「文学」と(新しい)literatureとの結びつきが強くなることによって、それまでliteratureに結びついていた訳語、例えば「文字」「文」「文章」などの語を、名辞「文学」が駆逐していつている状況が説明されているが、同様のことができる。つまり、literatureと結びついた「文学」は、それまでhumanitiesの対応語として有していた「文学」の外延と内包を、言い方を変えれば、『日本大辞典』における「文学」の語釈の第1定義((一)書物ヲ研究スル学藝。武術ニ對シテ一般ノ學問ヲ指

ス。)と第2定義((二)語學, 修辭學, 歴史學, ナドノ無形ノ學ノ總名。)を駆逐していった, ということである。

まとめ

結論的に言えば, 次のようになるであろう。明治期20年代前半までに成立していた「文学」と humanities の関係が, 名辞「文学」の側が literature の新しい理念の方に関係を「専ラ」結び変えることによって崩れた。そのことによって, humanities がそれまで対応してきた名辞「文学」とは別の名辞と新しい関係を結ぶ必要性が出てきたということであ

る。「人文学」という語の側から言えば, 「文学」概念の変容が「人文学」という語の出現を準備したということになる。その出現が英和辞典上で明確な形となって出現するのは, 1913 [T2] 年に刊行された E30『新撰英和辞典』(増田藤之助著, 丸善)においてである。

第2類型における「文学」の語の最後の現れである 1888 [M21] 年から「人文学」の最初の現れが確認できる 1913 [T2] 年の25年間に, 何が起こっていたのであろうか。次稿では, 国語辞典と英和辞典に関する今までの考察を基軸としながら, 専門辞典も活用しこの問いを考察していきたい。

表Ⅱ：英和辞典における英語 humanities に対応する日本語

発行年	調査した英和辞典	humanities に対応する日本語
1862 [文久2]	E1 英和对訳袖珍辞書	Humanities, 文孝詩孝及ヒ希臘羅甸ノ語孝ヲ摠テ云フ語 ※Humanist: 文孝者 ※Literature: 字知り
1867 [慶応3]	E2 英和对訳袖珍辞書(改正増補)	Humanities, 文孝詩孝及ヒ希臘羅甸ノ語孝ヲ摠テ云フ語 ※Humanity: 人情, 仁惠アルヲ, 人間, 文學 ※Humanist: 文孝者 ※Literature: 文字
1869 [M2]	E3 和訳英辞書(改正増補)	Humanities, 文學詩學及ヒ希臘羅甸ノ語學ヲ摠テ云ウ語 ※Humanity: E2と同じ ※Humanist: 文學者 ※Literature: 文字
1870 [M3]	S1「総論」『百学連環』	※Humanities: 人道 ※Literature: 文章
1872 [M5]	E4 英和对訳辞書	Humanities, 文學詩學及希臘羅甸ノ語學ヲ摠テ云語 ※Humanity: E2と同じ ※Humanist: 文學者 ※Literature: 文字, 学問
1873 [M6]	E5 附音挿図英和字彙	Humanities, 文學(語學, 理論, 羅甸及希臘語學, 詩學ヲ云) ※Humanism: 文學 ※Humanist: 文學者 ※Humanity: 人情, 仁心, 慈愛, 人間, 語學 ※Literature: 文學, 学問, 文字
1881 [M14]	S2 哲学字彙	————— ※Literature: 文學
1882 [M15]	E6 英和字彙(増補訂正)	Humanities, 文學(語學, 理論, 羅甸及希臘語學, 詩學ヲ云)
1884 [M17]	S3 哲学字彙(増補改訂)	————— ※Literature: 文學
1884 [M17]	S4 英華字典(訂増)	humanities, 古話文理之學
1885 [M18]	E7 英和正辞典	—————
1885 [M18]	E8 英和双解字典	—————
1885 [M18]	E9 英和对訳辞典	—————
1885 [M18]	E10 英和对訳大辞彙	Humanities, 文學(語学, 理論, 羅甸及希臘語學, 詩學ヲ云)
1885 [M18]	E11 英和和英字彙大全	Humanities, 文學(語學, 理論, 羅甸及希臘語學, 詩學等ヲ云)
1885 [M18]	E12 袖珍英和辞書	—————
1885 [M18]	E13 大全英和辞書(訂訳)	Humanities, 文學詩學及希臘羅甸ノ語學ヲ摠テ云語
1885 [M18]	E14 明治大成英和对訳字彙	—————
1886 [M19]	E15 新選英和字典	Humanities, 文學(語学, 理論, 羅甸及希臘語学, 詩学ヲ云)
1887 [M20]	E16 英和字海	Humanities, 文學詩學及希臘羅甸ノ語學ヲ摠テ云語
1887 [M20]	E17 増補訂正英和字彙: 第2版再版(第3版)	Humanities, 文學(語學, 理論, 羅甸及希臘語學, 詩學ヲ云)
1887 [M20]	E18 英和对訳新辞林: 插画訂訳	Humanities, 文學詩學及希臘羅甸ノ語學ヲ摠テ云語
1887 [M20]	E19 和訳英辞彙(増補訂正)	pl. 文學.

「人文学」の概念の考察（2）

1888 [M21]	E20 和訳字彙 (ウェブスター氏新刊大辞書)	<i>pl.</i> 文學 (語學, 理論, 羅匈及ビ希臘語學, 詩學等ヲ云)
1888 [M21]	E21 英和新国民大辞書	—————
1892 [M25]	E22 双解英和大辞典	(<i>pl.</i>) The branches of polite or elegant learning; belles-lettres. (複) 文學.
1897 [M30]	E23 英和字典	<i>pl.</i> 文學.
1901 [M34]	E24 新英和辞典	<i>pl.</i> 文學.
1902 [M35]	E25 新訳英和辞典	④ [<i>pl.</i>] 文學
1903 [M36]	E26 新英和辞林	Humanities, 文學; 古文學.
1904 [M37]	E27 最近英和辞林	Humanities. 文學詩學及希臘羅匈ノ語學ヲ総テ云語
1907 [M40]	S5 辞林	国語辞典における「人文」と「人文主義」の初めての現れ
1911 [M44]	E28 模範英和辞典	④ [<i>pl.</i>] 文學.
1912 [M45]	E29 詳解英和辞典	the ~ ies, 文學 [集合的ニ, 即チ博言學, 修辭學, 文法, 希臘又羅馬古文學等ヲ包括ス].
1912 [M45]	S6 英独仏和 哲学字彙	————— ※ <i>Humanism</i> 人性, 人文主義, 人生主義, 人道論, 人本主義
1913 [T2]	E30 新撰英和辞典	④ [一般ニ複数ニテ] 古文學, 文學, 人文學.
1913 [T2]	E31 大正英和辞典	④文學 (複数ニテ). The ~ ies, 文學, 古文學, 古典學.
1915 [T4]	E32 井上英和大辞典	<i>the ~ ies</i> , 人文學, 古典學 (希臘・羅典の)
1916 [T5]	E33 大増補 模範英和辞典	④ [<i>pl.</i>] 文學
1918 [T7]	E34 熟語本位英和中辞典 (改訂版)	the ~ ies. 古文學, 雅文學 (希臘羅典文學)。
1919 [T8]	E35 模範新英和大辞典	④ [<i>pl.</i>] 文學.
1920 [T9]	E36 袖珍英和辞典 (改訂版)	[<i>pl.</i>] 文學, 人文學.
1926 [T15]	E37 コンサイス英和辞典 (増訂)	[<i>pl.</i>] 文學, 人文學.
1927 [S2]	E38 研究社 新英和大辞典 (第1版)	<i>the ~ ies</i> 文學, 文藝, 古典文學.
1928 [S3]	E39 三省堂 英和大辞典	5古典文學 [divinityノ對テ一般ニ <i>the ~ ies</i> ト用キギリシャ・ローマノ古典・詩學・語學・修辭學ナドヲ包含スル]
1931 [S6]	E40 大英和辞典 (富山房)	4人文, 人文學, 文學. <i>the ~ ies</i> , 人文學, 古典文學, 文献學, 文藝.
1936 [S11]	E41 研究社 新英和大辞典 (第2版)	5人文學 (polite learning). <i>the ~ ies</i> , 文学, 文藝, 古典文学.
1953 [S28]	E42 研究社 新英和大辞典 (第3版)	5人文学 (polite learning). [···] <i>the ~ ies</i> (ギリシア・ラテンの) 古典文学; 人文科学 (社会科学や自然科学に対し文学・哲学・藝術などの学問)
1960 [S35]	E43 研究社 新英和大辞典 (第4版)	5 (1) (古) 一般教養, 人文学. [···] (3) [<i>the ~ ies</i>] 人文学 (polite learning) (主にギリシア・ラテンの古典文学また社会科学や自然科学に対し文学・哲学・芸術などの学問).
1970 [S45]	E44 岩波 英和大辞典	⑤ (<i>the ~ ies</i>) (ギリシャ・ラテンの) 古典文学, (自然科学・社会科学に対する) 人文科学.
1974 [S49]	E45 ランダムハウス英和大辞典 (第1版)	4 (<i>the ~ ies</i>) (1) 古典言語および文学の研究. (2) (学問の分野としての) ギリシア・ラテンの古典. (3) 人文科学: 自然科学と区別されたものとしての文学・哲学・芸術など. (4) 人文科学研究.
1980 [S55]	E46 研究社 新英和大辞典 (第5版)	3 a (古) 一般教養, 人文学. [···] c [<i>the ~ ies</i>] 人文学, 人文科学, ユマニテ (主にギリシア・ラテンの古典文学または (社会科学や自然科学に対し) 文学・哲学・芸術などの学問).
1982 [S57]	E47 オックスフォード・カラー英和大辞典	4 [<i>the ~ ies</i>] (1) (ギリシア・ラテンの) 古典文学. (2) 人文科学: 社会科学・自然科学に対して文芸・哲学・歴史などの学問.
1994 [H6]	E48 ランダムハウス英和大辞典 (第2版)	4 (<i>the ~ ies</i>) (1) 古典言語 [文学] の研究. (2) (学問の分野としての) ギリシア・ラテンの古典. (3) (自然科学と区別しての) 人文科学 (文学, 哲学, 芸術など). (4) 人文科学研究
2001 [H13]	E49 ジーニアス英和大辞典	4 [<i>the ~ ies</i> , the Humanities] 人文学, 人文科学 (米) (the liberal arts) <<自然科学・社会科学に対して哲学・史学・文学・語学など>>; (古代) ギリシア・ラテン語学 [文学 (研究)]
2002 [H14]	E50 研究社 新英和大辞典 (第6版)	3 a [<i>the ~ ies</i>] 人文学, 人文科学, ユマニテ (主にギリシア・ラテンの古典文学または (社会科学や自然科学に対し) 語学・文学・哲学・芸術などの学問). [···] c (古) 一般教養, 人文学.

【備考】記号の E1~E50は英和辞典を, S1~S6は英和辞典以外の参考書籍を示している。※には, humanities の対応語以外の, 本稿で有益だと思われる情報をイタリック体で記載している。また, the humanities, は the ~ ies と略記している。

註

¹ 高橋伸一 (2023) 「『人文学』の概念の考察—国語辞典における『人文学』という語の現れを中心に—」『京都精華大学紀要』56, 京都精華大学, pp.167-174.

² 実際, ドイツ語のHumanioraは『和独大辞典』(博友社, 1952)で, フランス語のhumanitésは『小学館ロベール仏和辞典』(小学館, 1988)で, それぞれ『人文学』という語に結びついている。

³ 福原麟太郎 (1949) 「英語辞書の話」pp.128-129, 研究社新英語教育講座編集部編『新英語教育講座 第6巻』研究社出版。

⁴ 同上, p.128.

⁵ OEDの場合, 語義は根本的な語義が展開する場合にはローマ数字を, 一般的な語釈の場合には算用数字を, 同一語義の中で位相・用法の違いは小文字のアルファベットを用いる。なおOEDでは, 引用したhumanityの第4定義の上位には, 'II. Connected with *humane*.' という根本語義が存在する。

⁶ 今回の調査対象である50冊の英和辞典の選定については, 早川勇編纂 (2006) 『日本の英語辞書と編纂者』(春風社), 特に「第II部 英語辞書年表」(pp.21-94)と惣郷正明・朝倉治彦編 (1977) 『辞書解題辞典』(東京堂出版)を参考にした。また明治・大正期の辞書に関して実物を参照できない場合には, 「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp/ja/>)を中心に, 「堀達之助『英和对訳袖珍辞書』デジタルライブラリ (立教大学)」(<https://library.rikkyo.ac.jp/digitallibrary/shuchinjisho/>)や「貴重資料デジタルコレクション (国立教育政策研究所教育図書館)」(<https://www.nier.go.jp/library/rarebooks/>)なども利用した。

⁷ 大槻文彦編 (1891) 『言海 (第2版)』出版社大槻文彦, p.903.

⁸ 鈴木貞美 (1998) 『日本の「文学」概念』作品社, p.132.

⁹ 前掲7, p.903. 『言海』における「文」の残りの2つの意味は, 「(一) アヤ。モヤウ。(二) 文章」であり, 補足として「武ノ反」という意味が連なる。

¹⁰ 前掲7, p.1103.

¹¹ 現代語の適応に関しては, 『日本国語大辞典 (第2版)』第2巻pp.1118-1119における「修める」の語釈を利用している。そこには「(治・修) ものごとを安定した状態にする。整った状態にする」といった根本的な語義のもとに10個の下位の意味が連なっている。

¹² 大久保利謙編 (1981) 『西周全集IV』宗高書房, pp.17-18.

¹³ 『日本国語大辞典 (第2版)』参照。

¹⁴ 前掲8, p.134.

¹⁵ 森岡健二編著 (1969) 『近代語の成立—明治期語彙編』明治書院, pp.2-4.

¹⁶ 同上, p.3.

¹⁷ 井田好治 (1980) 「日本における英和辞書発達小史」『横浜国立大学人文紀要. 第二類, 語学・文学』27, 横浜国立大学, pp.7-8.

¹⁸ 前掲15, pp.4-5.

¹⁹ 前掲8, p.127.